opusdei.org

# 「私はあなたがたを 友と呼ぶ」(5)~ どれほど互いに愛し 合っていることか~

キリスト者が周囲の人に示す 親しさは、いつも人々から称 賛されてきました。時代が変 わっても、新しい状況の中で 親しさの生き方が生まれま す。

2021/03/11

2世紀末、ローマ帝国のキリスト者 たちは激しい迫害を受けていまし

た。キリスト教徒となって間もない 法律家のテルトゥリアヌスは、より 身近で知ることとなった同じ信仰を 持つ兄弟姉妹の弁護に立ち上がりま した。不当に非難を受けているキリ スト者の生活について、その真実を ローマ帝国の為政者に向けて書面に 認したためたのでした。彼自身、入 信以前からキリスト者、特に殉教者 には敬意を抱いていました。しか し、今、テルトゥリアヌスは沢山の 市民の意見を集めた上で、キリスト 教徒の小グループに対する人々の声 を次の一言で要約しました。「見 ろ、奴らは互いに愛し合っている | [1]。初代キリスト教徒のこうした友 情に関して、この他にも沢山の証言 が残されています。 2世紀の初頭、 アンチオケの聖イグナチオ司教は、 殉教の地、ローマに護送される途 中、若いポリカルポ司教に手紙を書 きました。色々な助言をする中で、 彼は「よい弟子を可愛がっても師の 功績にはなりません」[2]と書き、教 会から離れている人々にも柔和さを もって接するよう忠告しています。

確かにキリストは歴史の中で、教会 や秘跡、また聖書を通してご自分を 現わされます。しかしそれだけでは なく、キリスト者が周囲の人たちに 示す慈しみを通して、キリストはご 自分を現わされるのです。友情と は、人となられた神、私たちにとっ て友の中でも最も親しい友となられ た神が開いて下さった「地上から神 に至る道」[3]の一つです。神様のイ ニシャチブとそれに対する私たちの 応えによる神秘的な共同作業を、私 たちは友情の中で手に取るように実 感することができます。

私たちの人間関係を通して人々にキリストの愛が届くためには、私たちが徳に成長し、また友情を深めるという点で進歩する必要があります。 周囲の人々を愛し、また人々と一緒に愛情を注ぐことができるように、

#### 肩を並べて

作家C.Sルイスは次の様に述べています。「愛人たちはお互いに相手に夢中になって通常向かい合っている。友人たちは何か共通の関心に心を奪われて相並んでいる」[4]。友人たちは、互いに肩を並べて前方を見ている。つまりこれからすることを見ているものなのです。 友人ならば

自分の友を愛するだけではなく、友 人と共に愛します。何かの活動やプ ロジェクト、高い理想に向かって、 友と同じ熱意と関心を持つのです。 何らかの公益のために一緒に努力を 傾けることで友情が生まれることも よくあります。その場合は、目指す 善に達成するため必要な徳を友達同 土で一緒に身に付けていくのです。 ですから、良い目標に熱意を燃や し、高貴な野心を抱くことが、いか に友情を育むのに役立つかが分かり ます。職業や学問に関する事業、文 化的、教育的、または芸術的なイニ シャチブ、読書や音楽鑑賞の小グ ループに始まり、社会や市民レベル の公益のためのプロジェクトのよう な、より一般向けの活動を企画する こともできます。若者や家族向けの クラブ、キリスト教のメッセージを 広げるための活動といった人間形成 に関するイニシャチブもあり得ま す。更に、家の中の装飾、お料理、 大工什事、庭の手入れなどの家事を

一緒にすることでも友情は深まりま す。もちろんスポーツや遠足、その 他の趣味を一緒にすることもできま す。こうしたあらゆる活動が友と楽 しく過ごす機会となり、そこから少 しずつ信頼が育まれ、互いに自分の 人生において新たな次元を切り開い ていくのです。そしてついには、友 達と共に過ごすためにこうした活動 をしているのか、それとも良い事を 一緒にするための友達がいるのかの 区別が難しくなる、いやきっと区別 をする必要もなくなっていくことで しょう。

これに対して人生に便利さだけを求め、物事を全て実用性からとらえる 人は、自分の友達を作る能力がとて も乏しいことに気付くことでしょ う。彼らにはせいぜい時間潰しのた めの相棒か、何か「役に立つ」仕事 での協力者がいるだけです。こうし た友情は「手段」にすぎません。な ぜなら自己中心的な計画のために友情を利用しているだけですから。

### こうでなければならない

友情は単に「物事を一緒にするこ としてはありません。「〈個人的 で〉、犠牲を惜しまぬ、誠実な、つ まり一対一の、心から心への友情 | [5]でなければなりません。 友の間 で言葉が必ずしも必要ではないとは 言え、友人同士なら会話を楽しむも のです。そして一人、乃至それ以上 の人と会話を弾ませる方法を心得る ことも友情を培うための一つのコツ と言えるでしょう。友情を育みたけ れば、活動に振り回されてバタバタ 過ごすことを避け、時計や携帯電話 に目をやることなく、一緒に過ごす ためにふさわしい時間を見つけるこ とが必要です。こうした友達との個 人的な会話をスムーズにするため に、ふさわしい場所や周囲の雰囲気 も無関係ではありません。例えば皆 が使う場所の片隅に個人的に話ができるスペースを設けるのも助けになります。聖ホセマリアはオプス・デイのセンターのインテリアに重きを置いていました。そうした物的な面が、趣味の良さや家族的な温かさと相まって、友情を育む雰囲気に役立つと思われたからです。

大抵の場合、友達仲間に他の人を招 き、示唆に富んだ経験談や興味深い テーマについて意見を交換し合う と、会話のレベルが自然に上がりま す。また友達同士で同じ本を読むこ とも役に立ちます。そうすれば過去 や現代の作家と意見を戦わせる機会 にもなりますし、他の沢山の同調者 を巻き込んでいくこともできますの で。そして見過ごせないことは、友 情があれば、度々同じ食卓を囲ん で、一緒においしい物を食べ、陽気 になる飲み物を楽しむものだという ことです。これは人間の深い真理の 表れと言えます。そうした長い語り

合いの時間には、私たちはまるで天 国の喜びを前もって味わっているよ うな心地がするものです。「『いの ち』とは本当は何なのでしょう。そ して『永遠』とは本当にどのような ことを意味するのでしょうか。この ことが突然明らかになったのように 思える瞬間があります。そうだ、こ れこそがまことの『いのち』だ。こ れこそが、まことの『いのち』でな ければならないものだと| [6]ベネ ディクト16世が書いておられるよう に。しかし真の友情のためには、友 達グループでおしゃべりするだけで は十分ではありません。友人同士が 親密に心と心を通い合わせる個別の 対話も必要です。そして良い友達な らばそのことをよく分かった上で、 不信感や妬み心なく、対話の機会を 作っていくことでしょう。こうし て、聖ホセマリアの言葉にあるよう に「ぐらついている友に折よく漏ら した言葉。巧みに誘い出したあの有 益な会話。またあの人への、大学で

の仕事を改善するために役立つ専門的な助言。そして……幸いにも軽率な言葉」[7]のために、打ち明け話をする好都合な状況が生まれるのです。神様は人々の霊魂をご自分に近づけるために、この対話の時間も利用されます。打ち明け話を通して「思いもよらぬ使徒職の可能性」[8]が広げられ、この世での神的使命に導かれることさえあるのです。

# 気忙きぜわしい世の中における友情

 心の中で強く友情を求めているからです。十字架の聖ヨハネの言葉を少し変えて、「友情がない所には友情を撒きましょう。そうすれば友情を見出しますから」と言うことができるかもしれません。

例えば、競争主義的な考え方が強す ぎる職場や周囲の環境は不信感をあ おり、表面的な礼儀正しさとは裏腹 に実用主義的、自己中心的なメンタ リティーをはびこらせます。まるで そういった姿勢で働いていなけれ ば、自分たちの方が他者から利用さ れてしまうと考えているかのようで す。もちろん我々はお人よしでいる わけにはいきませんが、こうした状 況は内部から改善されていく必要が あります。違う人生観、新たな生き 方の可能性を示していくことで。什 事の目標を達成するために、周囲の 人々に圧力をかけ、大声を張り上 げ、人をだまして利用する必要など ないのです。キリスト者は仕事が常

に奉仕であることを心得ています。 ですからそれぞれの職業や地位にふ さわしい立場から逸脱したり、倫理 基準への配慮に欠けたりすることな く、周囲の人々が親しく友達付き合 いのできる上司、同僚、依頼人、或 いは教師でありたいと強く望んでい るのです。

私たちも友情が育まれやすい環境作 りの手助けができるでしょう。過度 なストレスや活動主義、人々の分散 といった雰囲気や状況を広げないよ うに工夫することで。確かに今日わ れわれが置かれている目まぐるしい 社会の中では、新しい友情を築くた めの落ち着きを得ることが難しい時 もあります。休憩している時です ら、日々の雑事にかき乱されること がしばしばですから。しかしそんな 時こそ、謙虚さと自己の弱さについ ての自覚を持った上で、「イエス・ キリストの生涯を読み込んでいる| [9]人にふさわしい魅力的な模範を

# 互いを結ぶものに信頼して

聖ホセマリアが勧めたように、「社会構造と生活様式の現在の変化で開かれた態度を示して開かれた態度を示している。「はいがあるとしてなるがよりの自由を心からるとがよりの自由を心からるとをいる。「ある種の自己表現は、友愛の

雰囲気を醸成するための妨げ、或いは難しくする要因になり得ます。たまないになり得まない。自分の意見を述べる際にも断定的になる、個人に見が決定事項であるかのよりに見が決定する。他のなど、これらは自己に見いるない、度と言えるでしています。

的、政治的な議論と同じように考え てしまわないことが大切です。友愛 にあふれた語り合いは、自分の考え を相手に説得することが目的ではな いのです。たとえそれが教会の教義 や古典的な真理についてであったと してもです。「物事を本来の名で呼 ぶ」必要がない、「善悪を見極める 力 しはいらないというわけではあり ません。そうではなく、相手方と何 らかの同じ原則や権威を共有した対 話でなければ議論には価値がない |13|と言いたいのです。友情から個 人的な回心に導かれることもありま すが、普通は相手と合わない点を強 調するよりも一致する点を探す方が 良いでしょう。大げさに知的な講釈 を加えることなく私たち自身の個人 的な経験を伝えていきましょう。互 いの心配事や悲しみ、喜びを誰かと 分かち合うことで強さをもらうこと を知らせるのです。そして常に大切 なことは耳を傾けることです。聖ホ セマリアの言葉にあるように、友情

は「与えること以上に理解すること にある」[14]からです。

次の事実を心に留めておくと役に立 つでしょう。人々は大抵、人間誰も が心の奥に抱いている強い望み、つ まり愛し愛されたいという望みに動 機づけられて生活の大部分を過ごし ているということを。この周囲の 人々との一致と充実した価値ある人 生への渇望は、たとえ様々な原因で 長年鈍くなっていたとしても必ず常 に再び心に湧き上がってくるもので す。良い友であるならば~必ずしも 期待していた応えが返ってくるとは 限らなくても~待つことを心得てい ます。人生にあり得る危機に直面し ている友の傍に留まり、その友が自 分の傾ける愛情に光を見出し、その 光に心を開いてくれるまで待つので す。

### 神様の姿を現す

コリントの信徒にあてた手紙のあの 有名な愛の賛歌の中で、聖パウロは 「愛は忍耐強い」(1コリント13,4)

と書いています。オプス・デイの属 人区長もこの点について、司牧書簡 の中で思い出させます。「友情が生 まれることは、思いがけないたまも のによく似ています。それゆえ、焦 らずに忍耐して待つことが必要で す。時には、悪い経験や痛手によっ て、身近にいる人との関係が友情に 至るまでに時間が掛かることもある でしょう | [15]。 聖ホセマリアは 常々、「神のペース」で進むよう私 たちを励ましていました。実際、彼 の人生は誰の目から見ても使徒職に おける大胆さにあふれていました。 たとえ遠く離れていても、自分の命 を危険に晒してまでも人々に会いに 行きました。そのことは聖ホセマリ アと大学時代から親交が深かったパ スクアル・ガルベ氏と交わした言葉 からも分かります。当時、スペイン

はひどい宗教迫害の真っ只中で、聖 ホセマリアは司祭の身でありなが ら、友人のガルベ氏に会うという目 的のためだけに、様々な危険をかい くぐりながらバルセロナにある彼の 家に足を運んだのでした。それ以 前、マドリッドの道を歩きながら、 ガルベ氏はホセマリアにこう尋ねま した。「ホセマリア、君は僕に何を してもらいたいんだい」。すると次 のような返事が返ってきました。 「僕は君を愛している。何もいらな いよ。ただ君には善良で正義にあふ れた人になって欲しいと思ってい る」。聖ホセマリアは、次に彼とバ ルセロナで会った時、つまりあの凩 難の最中さなかにもたじろぐことな く、友を真理に導くために、打ち明 け話を聞こうと出向いた折にもこの 言葉を繰り返したのでした[16]。

オプス・デイの創立者は忍耐の徳を 磨くようにといつも勧めていまし た。「忍耐すればより深く人々を理 解することができる。ちょうど時と共に美味を増す良質の葡萄酒の進歩く、人々も時とともに著してですり、私たちは神様が私たちに対力をはからないものでの説性をでが就任まりに示すからにようによっておられたようにしたがないでが、ないでで述べるによってあがなけるではよってあがなけるのは人間のなさり、[18]ですから。

り、悲しみに心を奪われてしまった りすることなく。

人生の暗闇の時期には、友から赦される経験は希望の源です。私たちの横柄さにもかかわらず、友が必ず待っていてくれているという事実は、私たちにとって、生きた神の姿です。どんな時にも私たちを赦し

父として御腕を広げて私たちの帰り を待っていて下さる私たちの第一の 友、それが神様ですから。

Ricardo Calleia

[1] テルトゥリアヌス、『護教論』、39章。

[2] アンティオケの聖イグナチオス、『ポリカルポへの手紙』、2。

- [3] 聖ホセマリア・エスクリバー、 『神の朋友』、314番。
- [4] C.S.ルイス、『四つの愛』、蛭沼 寿雄訳、新教出版社、第3版、2004 年、p.87。
- [5] 聖ホセマリア・エスクリバー、 『拓』、191番。
- [6] ベネディクト16世、 回勅『希望 による救い』、11番。
- [7] 聖ホセマリア・エスクリバー、 『道』、973番。
- [8] 同上。
- [9] 聖ホセマリア・エスクリバー、『道』、2番。
- [10] 教皇フランシスコ、回勅『ラウダート・シー』、222-223番を参照。

- [11] 聖ホセマリア・エスクリバー、『拓』、428番。
- [12] フェルナンド・オカリス、司牧 書簡、2019年11月1日、9番。
- [13] Saint Thomas Aquinas, Quodibet IV, g. 9, a. 3 参照。
- [14] 聖ホセマリア・エスクリバー、『道』、973番。
- [15] フェルナンド・オカリス、司牧 書簡、2019年11月1日、17番。
- [16] Jordi Miralbell, Días de espera en guerra, Palabra, Madrid, 2017, p. 75; 97 y ssを参照。
- [17] 聖ホセマリア・エスクリバー、『神の朋友』、78番。
- [18] ベネディクト16世、教皇就任ミ サでの説教、2005年4月24日。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/tomo-to-yobu-5/(2025/11/20)